

Ⅲ.

不思議の国

OSAKA

～バラバラのまんじゅう～

全国から見れば、突如として浮上したように見える「大阪都構想」や、唐突に国政に登場した「日本維新の会」。これらは大阪では決して“突然”ではないのだが、このことを理解するためには「根っこが大阪市問題にある」という背景を知ることが不可欠だ。

大阪市がどういう自治体か。ここではその背景をまとめておきたい。

〈一番偉いのは“スーツが税金で支給される”大阪市役所〉

大阪市は、日本の近代の都市制度のなかで最古の市の一つ。1878年（明治11年）から東京・京都と並び「勅令指定都市」という特別な扱いを受け、市制施行された1889年（明治22年）にも国が「市制中東京市京都市大阪市ニ特例ヲ設クルノ件」を制定し、東京市・大阪市・京都市は特別な扱いの3市とした。大正時代には6大都市の一つとして国の事務について“大阪府の支配下に服さなくてよい”という特権も与えられている。

全国一律の扱いをされてきた大阪「府」などに比べたら、古くから国に特別扱いを受けてきた大阪「市」のほうが、はるかに由緒正しくトラディショナル。昔から大阪市は「大阪府なんか相手にしないでいい」というお墨付きを国から与えられてきているのだ。

大阪市役所という行政組織も、市の職員も、歴代の大阪市長も大阪市議会議員も、とにかく大阪市にはそんな特権意識が根強く、いわば「大阪市は大阪府より格が上」「大阪が一番偉い」という感覚を自負するのが大阪市という存在だった。また、周辺市町村も含めて、大阪の政治・行政の業界全体でも、このことは周知の事実であった。

その一方で、大阪市は、古くて強い特権的な市であったがゆえに、その内部に膿が溜まりまくってきた自治体でもあった。

大阪市の雰囲気、実感として伝えていこう。平成 15 年ぐらいから2年半の間、私は箕面市の職員（総務省から出向）として仕事をしていた。その時、「行政改革」を担当していたのだが、一番迷惑だったのが大阪市の存在だ。

当時の大阪市の、「総務大臣が『ちょっと待ってくれといいたくなる』と大阪市を批判した」と報道されるなど、職員の厚遇問題がメディアで華々しく叩かれていた頃だった。市長は、平松邦夫前市長のさらに前の関淳一市長の時代だ。後述するが、関淳一市長は、大阪市の職員あがり（出身）でありながら、実は大阪市の行革に珍しく本気で乗り出した人だった。

その時にメディアに叩かれた内容は、たとえば、「ごみ処理担当や市バス運転手などで年収 1000 万円以上あった職員が計 830 人」「“制服” との名目で1着3万円以上のスーツを支給」「長期勤続の職員に5万円分の現金・旅行券・図書券を給付」など、他の市町村から見ても目が点になるようなことばかり。

こうした大阪市の姿がメディアで大々的に報道されると、世間は「大阪市がそうなら、他の市町村もそうだろう」という目で見ると、これには大迷惑だった。多くの市民から箕面市にも問い合わせが入り、「いやいや、あんなの僕らもびっくりしています。大阪市さん、今どきそんな手当てがまだ残っていたの？ っていう感じです。」と言ってもなかなか信じてもらえるわけもなく……。

大阪府内の周辺市町村、いわば同業者から見ても、異常に“守られまくってきた組織”、それが大阪市だったのだ。

〈改革派の市長が落選する街〉

厚遇問題が勃発した当時の市長だった関淳一さんは、大阪市職員の出身で、もと大阪市の職員組合の力で擁立された。歴代の大阪市長は、大阪市職員組合の

力で擁立されるのが基本で、大阪市職員組合とうまくやらないと大阪市長にはなれないし、市長になってからも、職員数4万人を超える巨大な行政組織で仕事をうまく回すためには大阪市職員組合と仲良くしなければならない。この大阪市の労使関係は、もはや歴史的な伝統といっても過言ではない。

関淳一市長も例外ではなく大阪市職員組合に擁立された市長ではあったのだが、厚遇問題を受けて、後半にはある意味吹っ切れたように改革派に変貌した珍しい存在だ。大阪市職員組合と決別宣言をし、一度は市政改革への信を問うため辞任して出直し選挙で再選を果たし、強力に改革を推し進めた市長だった。

助役（現在の副市長）の外部登用や、民間人による監視機関の設置、福利厚生の見直し、職員数の大幅削減など、職員組合に攻撃されても“火だるま”のように改革を進め、ついに2007年の大阪市長選挙では「大阪市営地下鉄の“民営化”」を公約に掲げるところまで突撃し……なんと、それでも落選してしまったのだ。

〈改革派の関淳一市長を負かした黒幕は誰か?〉

2007年の大阪市長選挙、改革派の関淳一市長に勝利したのが平松邦夫市長だ。アナウンサーとして知名度が高く、爽やかなイメージの平松邦夫さん。対して、大阪市の職員出身でドロ臭いオーラをまとった関淳一市長。大阪市民は、平松邦夫さんに爽やかで新しい風を吹き込んでくれるように感じ、関淳一市長に旧態依然とした既得権益的なイメージを重ねるという、大きな誤解をしたのだった。

それを仕掛けたのは誰か。実は、平松邦夫候補を擁立して関純一市長を敗北させたのが、何を隠そう大阪市職員組合だったことは、当時あまり気づかれないうままだった。

大阪市職員組合の戦術は、完全に成功した。本当は改革を推進しようとしていた関淳一市長が5万票差で落選し、大阪市職員組合が擁立した平松邦夫氏が当選し